

銭稻孫の私設日本語図書室「泉寿東文書庫」

稲森, 雅子
九州大学大学院人文科学府 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1906431>

出版情報 : 中国文学論集. 46, pp.152-169, 2017-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

錢稻孫の私設日本語図書室「泉寿東文書庫」

稲 森 雅 子

錢稻孫（一八八七—一九六六）は、青少年期七年間を日本で過ごし、『万葉集』『源氏物語』など日本古典文学の翻訳を試みた先駆者の一人である。民国期の北京大学や清華大学で日本語を教える傍ら、九州大学中国文学研究室とでも知られる。日中戦争終結後は文化侵略に加担した所謂「漢奸」とされ、文化大革命期に亡くなったため、資料に乏しくその生涯には不明な点も多い。近年、鄒双双氏により詳細な研究が行われ、『文化漢奸』と呼ばれた男——万葉集を訳した錢稻孫の生涯』（東方書店、二〇一四年）が刊行された。

その中で、民国一九年（一九三〇）自宅に日本語図書室「泉寿東文書庫」を開設し、日本語書籍を蒐集したことが指摘されているが、その詳細については十分解明されているとは言えない。他方、一九三〇年頃から日本側の記録が増加しており、日本との関係が深まっていったことが窺われる。この図書室開設が関係深化の契機となった可能性は考えられないだろうか。本稿では、新たに発見した設立趣意書、公益財団法人東洋文庫所蔵の機関誌や関係者書簡などにより、図書室の設立意図や概要について明らかにしたい。

一、錢稻孫の略歴

最初に錢稻孫の略歴を紹介しておきたい。錢稻孫は、光緒十三年（一八八七）浙江省帰安県に外交官錢恂（一八

五三（一九二七）の長男として生まれた。母单士厘（一八六三—一九四五）も『清閨秀藝文略五卷』や旅行記『癸卯旅行記』などを著した才媛であった。また同い年の叔父に音韻学者の錢玄同（一八八七—一九三九）がいる。

父錢恂は、錢稻孫誕生（光緒十三年）に湖南按察使薛福成（一八三八—一八九四）より浙江寧波鄞県天一閣の蔵書目録編纂を命じられ、翌年『天一閣見存書目』四卷首末二卷（薛福成編）が刊行されている。その後外交官として欧州各国へ赴任し、帰国後は、張之洞（一八三七—一九〇九）幕下に入り、光緒二五年（一八九九）二月游学日本学生監督に任命され来日した。

光緒二六年（一九〇〇）錢稻孫も母单士厘に伴われ、妻包豊保、弟燧孫とともに来日し、慶応義塾幼稚舎、成城学校文科、東京高等師範学校附属中学校で学んだ。光緒三十三年（一九〇七）父のオランダ赴任に伴い、日本を離れイタリヤへも随行し、宣統二年（一九一〇）帰国した。中華民國元年（一九一二）民国教育部に入り魯迅とも同僚となる。民国三年（一九一四）国立北平図書館兼務、民国七年（一九一八）北京大学日本語講師、民国一六年（一九二七）に教育部を辞して清華大学外文系講師となる。民国二十一年（一九三二）同大学教授に昇任し、『源氏物語』の翻訳にも取り組み始める。民国二四（一九三五）七月より一年間休暇を取得し夫人同伴で日本に滞在した。翌年日本の東方文化事業部により北京近代科学図書館が開設されると日本語講座講師の一人となる。民国二八年（一九三九）日本政府が設立した（偽）「北京大学」の秘書長に任じられ、終戦まで同大学図書館長、学長などを歴任し、日本との文化交流の中国側代表の一人とされた。なお、この間に翻訳書『日本詩歌選』（文求堂、一九四一年）、『盆樹記——謡曲』（北京近代科学図書館、一九四二年）を刊行している。

民国三五年（一九四六）「漢奸」として懲役十年、公民権剥奪六年の判決を受け入獄した。三年間服役した後、出版社で翻訳業務に従事した。文化大革命が勃発すると紅衛兵に自宅を襲撃され、自身が暴行を受けたばかりでなく蔵書も壊滅的な被害を受け、一九六六年北京で亡くなった。

日中戦争終結までのキャリアを概観すると、日本語教育・翻訳のほか図書館に関わる仕事にもしばしば携わっており、錢稻孫にとって図書館は重要な存在であったのかもしれない。ちなみに近年では戦禍から大学図書館の蔵書を守ったとして中国国内で再評価する向きもある⁴⁾。

二、徳富蘇峰記念館所蔵「泉寿東文書庫創立趣意書」

「泉寿東文書庫」について、石田幹之助（一八九一―一九七四）は「泉寿は先生の号であり、東文とは日本文といふこと」という。これに従えば銭氏日本語図書室の意である。郷氏は外務大臣宛在中国公使館報告書「支那人の日本語及日本事情研究状況調査」報告文により図書室開設趣旨を考察されたが、情報源である銭自身の文献は挙げられていない。今般、神奈川県二宮町の徳富蘇峰記念館（公益財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団）所蔵の徳富蘇峰宛書簡の中から「泉寿東文書庫創立趣意書」を発見した（図一）。同財団の収蔵リスト上の発信人氏名が「銭福孫」となっていたことからこれまで確認されていなかったものである（二〇一七年二月二三日「銭福孫」へ修正済）。

徳富蘇峰（一八六三―一九五七）は、本名猪一郎、熊本県出身。明治から昭和前期にかけて活躍したジャーナリスト、評論家、歴史家で『国民之友』『国民新聞』を発刊した。当初は平民主義を主張していたが、日清戦争後国家主義を鼓吹した。事業の傍ら半世紀にわたり古典籍・古文書など約十萬冊を収集し成篋堂と名付けた。著書は『近世日本国民史』百巻など多数、小説家の徳富蘆花は実弟である。銭から趣意書が送付される前年（一九二九）、蘇峰は、自ら設立した国民新聞社を退社し、同郷の本山彦一の招きにより大阪毎日新聞社・東京日日新聞社社賓となっていた。

書簡は一枚（縦約二六×横五三センチメートル）で表面に宛先住所が書され、宛名欄には朱棹が印刷されている。裏面には中国語文、日本語文の創立趣意書があり、銭福孫の自署も印刷されている。以下に全文を記す。

泉壽東文書藏徵書緣起

東邦纂述。新義騰起。懷鉛提槧。日就月將。殺青相聞。歲逾萬卷。譬其盛矣。自頃海内承學之士。搜牢放軼。諷訪多聞。他山之用。取材甚衆。斯固記前所資。有煩輒寄者焉。惟此土諸家。購求臧弃。多在一時。萬本從同。但適獨對。聚而觀之。精而未博。蔽而未周。欲取其全。蓋亦難已。福孫行能無似。知見不弘。自顧二十年以來。殫心講授。典衣有得。挿架未遑。分別部居。略餘新籍。茲謹出其所藏。勗爲泉壽東文書藏。伏願文章碩彥。縞紵知交。

名山二西之傳。大雅九能之雋。各傾秘笈。同陳寶書。悉舉琳琅。助其箸錄。將見顏家授簡。不薄鮮卑。臣向然藜。方同天祿。恭成嚙引。實念繼聲。

(一) 書藏。專以日文著撰爲主。異日擴充。亦搜西籍之有關東方學術者。

(二) 書藏。但爲中日學者。謀學術研究之便利。不務其他。刊行介紹學術之雜誌圖書。其他有益學術之事業亦次第籌之。

爲謀學者互通聲息。有所見委。視力所逮。樂効奔走。

(三) 書藏。旨在公開。其閱覽規則。另定之。

(四) 書藏。暫設北平西四牌樓受璧胡同九號。一俟籌定獨立基金。即另謀館址。

(五) 寄贈之書。不論新舊多少與種類何屬。俱所歡迎。

(六) 如以財力爲贈。願得指定用途。其不指定用途者。以半數入基金。以半數購買圖書。或入維持經費。

(七) 會計。以中日會友共同監督管理。

中華民國十九年一月一日

北平、西四牌樓、受璧胡同、九號 錢稻孫

泉壽東文書庫創立趣意書

駸々たる日本文化のうち、就中出版の事業に至りては、近年殊に驚嘆すべき進歩を示し、學理の新義、文藝の創作、一歳よく萬卷の多きに出で、我國學界の喪ひたるもの、亦た之を東邦に探求するの隆盛にして、最近の學術文化、東書に依りて益を收めたるところ極めて甚大なり。而して我が學都の北平に於て之を顧みるに、著名なる圖書館また頗る東書の蒐集に努めつゝあるも、その類自ら各専門に傾き、一門に精なりと雖も狭くして博からず、一般の研究に尚ほ未だ廣く便なりと謂ふ可からず。不肯茲に鑑み、斯友有志に之を諮り、二十年來講授の餘閒、購讀積藏するところの東書を以て基礎と爲し、泉壽東文書庫を創設して之を公開し、以て聊か此不便を補はんとす。雖然、所藏の東書、その質不齊、その數たるや亦た貧弱、加之寒士微力、志徒らに餘りあるも、書庫體を成さず

錢稻孫の私設日本語圖書室「泉壽東文書庫」

して、公用に資するところ甚だ乏しきを憾む。即ち此學を善隣の君子に訴へて、中日文化の融洽を達成せんと欲する所以なり。冀はくは讚助を賜へ。

(一) 本書庫は、専ら日本人の著譯に成る圖書蒐集を主とし、傍ら東方研究に關する各國著書をも蒐集す。

(二) 本書庫は、中日學者の爲め學術研究の便利を謀り、他に渉らず。

本書庫は、學術の雜誌、圖書を刊行、紹介し、その他學術に有益なる事業も亦た次第に着手す。

本書庫は、御希望に依り、力の及ぶ限り、中日兩國學者の聯絡を謀る。

(三) 本書庫は、一般の閱覽に公開す。閱覽規則は別に之を定む。

(四) 本書庫は、暫く北平・西四牌樓・受璧胡同・九號・錢宅内に設け、維持方法の確立を俟つて、適當の地に移転する計畫なり。

(五) 圖書は、その新舊多少、種類の如何を論ぜず、御不用のものを御寄贈下さらば幸甚なり。

(六) 金錢の御寄附を受けし場合は、その用途御指定のものを除き、其他は、將來の大成に資する爲め、一半を以て基本金に積立て、餘半を以て圖書購入及び書庫維持の費用に充つ。

(七) 金錢收支の確實を期する爲め、中日兩方の篤誠なる會友に會計を委託し、且つ収入は一切之を確實なる銀行に預存す。

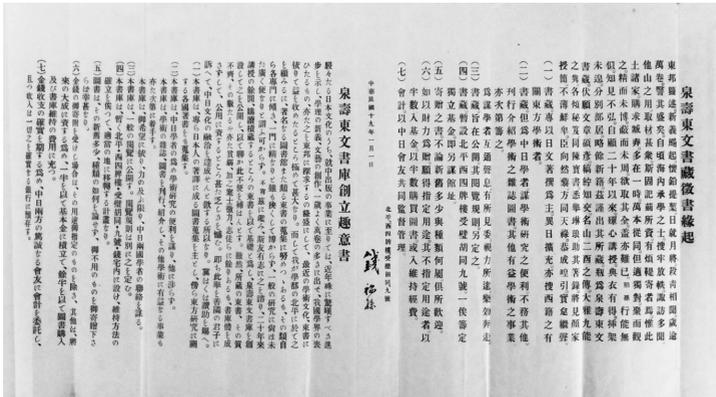
趣意書より名称は「泉寿東文書藏」(中国語)、「泉寿東文書庫」(日本語)であつたことがわかる(本稿では日本語呼称に従う)。趣意書には、設立経緯、運営方針、将来展望などが述べられている。錢が日本學術研究の目覚ましい進展を高く評価し、その情報を迅速かつ多方面で収集する必要性を痛感していた様子が知られる。民国十四年(一九二五)中華圖書館協會が発足し、民国十七年(一九二八)国立北平圖書館が開館していたが、錢のように私設図書館を「一般」(市民)に公開し、かつ日中間で研究者の連携支援も行うと宣言したことは画期的なことであつたろう。加えて体制が整えば私邸から適当地への移転も目指すとしており、錢が並々ならぬ決意をもって泉寿東文書庫を開設した様子が窺える。

【圖一】徳富蘇峰記念館（徳富蘇峰記念塩崎財団）所蔵 徳富蘇峰宛書簡
 （縦約二六×横五三CM）

表面（宛名）



裏面（本文）



銭稻孫の私設日本語図書室「泉寿東文書庫」

ところで、当該創立趣意書はいかなる経緯で徳富蘇峰のもとへ送り届けられたのであろうか。管見の限り銭稻孫と徳富蘇峰との間に直接的な接点は見出せない。他方、後述する銭の日本人支援者松村太郎は、蘇峰が社主であった『国民新聞』北京駐在特派員との記録がある。

このほか松本亀次郎『中華五十日游記』（東亜書房、一九三一年）所収「中華教育視察紀要」中にも図書室紹介とともに本趣意書の日本語全文が掲載されている。松本亀次郎（一八六六～一九四五）は、中国人留学生への日本語教育に取り組んだ人物で、魯迅や周恩来らに日本語を教えたことでも知られる。松本は明治三六年（一九〇三）に弘文学院講師となり、昭和五年（一九三〇）四、五月、東亜高等予備学校校頭として中国各地を教育視察した。五月四、十一日北平に滞在し、大学で日本語を教えていた銭と「屢面會した」

という。趣意書紹介にあたり「専ら日本文の書籍を蒐集し、両国学者の爲、學術研究の便を図」っており、日本人有志が「書物を寄贈して、一般の国民人に日本に関する知識を普及させたならば、大いに日本を理解する基礎に成らうと思ふ」と期待の言葉を添えている。

三、支援者から岩波茂雄への書簡

昭和四年（一九二九）十二月下旬、翌五年（一九三〇）一月下旬、志賀直哉（一八八三～一九七一）と里見淳（一八八八～一九八三）は南滿洲鉄道の招待で滿洲へ旅した。一月十四日より十日間北京にも滞在した。志賀は二度面会しており、二度目は錢宅に招待されている。志賀の日記には二度とも同席した人物「松村太郎」の名が記録される。初回十六日には錢と二人で宿泊先扶桑館を訪れ、二〇日錢宅訪問の際は志賀を迎えに来ている。ここから錢と松村がかなり親しかったことが推測できる。岩波書店編集部編集『岩波茂雄への手紙』（岩波書店、二〇〇三年）を確認すると、果たして松村太郎から書簡三通が送られ、株式会社岩波書店に所蔵されていた。最初の書簡昭和五年三月七日付⁹には、泉寿東文書庫設立経緯が見える。以下に全文を示す。

岩波先生

謹啓。私は錢稻孫氏創立の泉壽東文書庫関係者の一人です。まだ御目にかゝりましたこともなく、一突然書を呈するぶしつけを御海容下され、向後御教示下さらば、幸甚の至りで有ります。

今回錢氏の書庫創立以来、格別の御同情を辱ふし、御発行の雑誌『思想』の交換を御允諾下され、誠に感謝に辞なき次第で、難有御禮申上ます。

錢氏の書庫創立に至りし徑路に就ては、多年同氏と御昵懇の先生には、篤くに御承知かも知れませんが、存じませぬ共、関係者の一人として、私からも一應申上げ、御了解を得たいと存じます。

御承知の通り、錢氏は本職の旁ら多年各学校に於て日語教授を担任して居られます関係上、支那側に、日本人

の撰著閱讀を鼓吹せられてゐました。是れ、學術上の見地よりすれば、各學術就中東洋學に對する日本人の研究が、最近異常に進歩發展し、歐米の學者すら大に注意しあるに拘はらず、獨り支那側の學者が、仍然として舊態を脱せざるもの多きにつき、日本人の著書によりて、支那學者連を鞭撻して覺醒せしめんとするに有ります。又た政治上の見地よりすれば、日本及び日本人に對する支那人従來の觀察は、兎角外國人の著書によりて窺知するもの多かりし為めか、一向実相にタッチする能はざるを以て、できる丈、日本人の著書によりて、直接了解せしめんとするに有ります。

然るに各学校及び図書館に所蔵する、日本人の著書は、至つて尠なく、最も多く所蔵すると称せらるゝ北京大学の如きすら、二千餘部に過ぎず、しかも、大部分は以前のものに係り、最近の著書甚だ少く、北平図書館は、錢氏の關係されし以來、極力購入を鼓吹しあるも、經費の關係上、意の如くならず、大に遺憾の念を抱いてゐられました。

是に於て錢氏は日本文書籍の大図書館の必要なるを痛感し、往年、日本が對支文化事業に着手することゝなるや、氏は疾早く、某氏を介して、支那の良書を蒐集すると同時に、日本の書籍をも購入して、支那学徒の便に供せられん事を建築されし由なるも、その容るゝ所とならず、文化事業は、將來兎に角、當分専ら支那書籍のみを購入することゝなりたるのみならず、その所蔵も、一般の閱覽に公開せず、單に、研究員文だけの研究上備付くるものに過ぎざるより、錢氏は大に失望してゐられました。

然るに、支那人士の、日本書籍研究熱はその後益々旺盛になりつゝあるを以て、錢氏は、日本の有力者の來平毎に、その設立の必要にして急務なるを説いてゐられました。日本側は誰とて之に賛成せざるものなきも、又誰一人として、帰國後之を鼓吹せしものも無い様でした。是れは必ずしも、日本人の口先許りのお世辞でなく、實際今日本が不景氣なので、こんな事に耳を傾けるもの無い為めでもありません。

錢から屢々私も意見を徴せられました。併し私の如き、老書生の力に到底及ぶ所ではありませんのですが、去ればとて、棚からポタ餅の落ち来るを待つて居たのでは、何時成立するか、殆ど目途がつきません。そこで、私は、昨年の初夏と思ひますが、大図書館の成立などは、當分成立の見込なきが如し。之を晏然として待つか、然らざれば

ば、先づ各自の所蔵書を提供しあつて、小規模のものを起し、一方各方面の同情に訴へて圖書の寄贈を請ひ、一方大図書館設立の機運を促がしては如何との意見を述べ、将来好き機運熟し、大図書館の設立さるゝ場合、この小書庫も、之に合併すれば、目的達成の上に何等差支なかるべしと申し、錢氏も之に同意され、その後同志とも種々協議の上、漸く本年に入りて趣意書を發表して創立に着手した次第であります。

私共は申すに及ばず、錢氏として資力裕かでありませぬので、極力日本人側の同情に訴へて圖書の寄贈を仰ぎ、蒐集する代りに、日支両方面の便宜になる事は、関係者の力の及ぶ限り、書庫に於て盡力し、その便を計ることにし、且つ経費節約の見地より書庫も同氏宅の一部を充つることになりましたので有ります。

或は、貧亡人揃のやる事業で、何も出来まいと輕蔑する向きもあるかも知れませんが、そんな事は、初めから覺悟のうちで、只だ互に努力し合ひ、漸を期そうと云ふので有ります。由来資力を有するものが、斯んな考を起さず、銀行を食つたり、會社を荒したりする事を以て、能事としてゐますのは、日本人でも支那人でも同一であります。

夫は兎に角として、書庫創立と同時に、支那の書店と聯絡し、漢籍の、日本側への取次を開始しました。マダ充分日本側に知れ渡りませぬので、利用者多く有りませんが、逐次増加しつつあります。

支那側に対する日本書籍取次も開始することに、當初から考へてゐましたが、尠からざる保証金を提供する内規なる由にて、目下の書庫の資力として之に堪えないのであります。然るに、支那側より平凡社發行の書道全書、世界美術全書等数部の取次方を依頼されましたので、平凡社と直接取引を開始すべく目下交渉中であります。

就ては先生の御経営になる書店とも、直接取引を御允諾して頂ければ、甚だ結構と存じます。私共の希望する所は、もし、御允諾下さらば、向後新刊書發行毎に一部宛、書庫の方に御寄贈を願ひたい。書庫は寄贈を受くると同時に新刊紹介を左記日刊漢字新聞の二三に載せ、購読希望者には、本書庫に於て取次ぐことは勿論見本一部も本書庫に備付け無料閲覧に便すること附記して置きます。

北平に於ては 順天時報（日本人経営）新晨報（閻錫山の機関新聞）

全民報（北平市長張蔭梧の機関新聞）

益世報（中立）

天津に於ては 大公報（中立）

此等は北平、天津で有力なるもので、此数社とは聯絡があるのです。

斯くすれば、支那側の注文者も必ず有ることゝ存じます。注文を受けし場合は、割引價格に郵税を添へて本書庫より注文します。或は一冊寄贈を受けた上に、更に割引までは甚だ蟲がよすぎるとのお考があるかも知れませんが、此の見本の有無は、大に賣行に影響します。上記平凡社の書道全書、世界美術全集の如きは、同社の某氏より寄贈しありしものを、支那側で閲覧して注文を頼みしものです。（此の中に外国人一人有ります。何れも實物を見てゝす）餘談では有りますが、預約ものに対しては、支那の方は、多く一時拂で注文されます。

兎に角、斯くして頂ければ、書庫としても、逐次蔵書も多くなり、注文者としても、一應内容を閲た上、安心して注文でき、又た貴書店に於かせられても、数部宛賣擴められ得ますので、三方とも、非常の便利であらうと思はれます。何卒、書庫御援助の見地から、御允諾下さるやう、懇願します。（新刊紹介は、登載毎に、その切抜を貴覽に供します）

錢氏は最初、三四月頃から、「學舌」と申す、漢文の不定期刊行物を出し、支那側に配布する外、「字紙籐」の附録として日本側にも配布する予定でしたが、東京帝大の原田淑人助教授が、北京大学と交換教授の為め来る十日頃着平せらるゝ予定で、錢氏が、その通譯を担任することになり、多忙の為め、又数ヶ月延期の已むなきになりました。「學舌」には、専ら日本に於ける支那學術研究の概要や、日本新刊物の紹介を為すものなのです。

色々雑多に書きならべましたので、甚だ躰をなしません、何卒御判讀の上、御允諾の榮を得らるれば、幸甚とする所であります。先は御願まで恐謹言

北平、東城、西堂子胡同、中華公寓内

松村太郎

三月七日

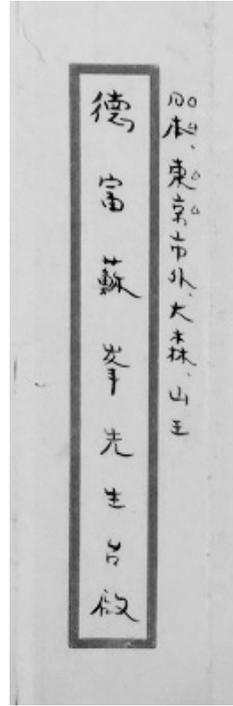
書簡には詳細に図書室開設までの経緯が綴られ、これまで曖昧であった泉寿東文書庫の設立経緯を詳しく知ることが出来る。銭は、従前より中国国内に日本の最新の学術情報を提供する「日本文書籍の大図書館必要なるを痛感し」ており、「対支文化事業」開始後間もなく人を介し「建策」したり、「日本の有力者の来平毎に、その設置の必要にして急務なるを打診する」も実現に至らなかつたとする。東方文化事業総員会発足は、民国十四年（一九二五）七月であり、銭はこの頃から日本語書籍専門の図書館設置を働きかけ続けていたことがわかる。昭和四年初夏頃、松村が「各自の所蔵書を提供しあつて、小規模のものを起し、一方各方向の同情に訴へて圖書の寄贈を請ひ、一方大図書館設立の機運を促がしては如何」と提案し、約半年で開設したとする。なお、対支文化事業の一環として民国三五年（一九三六）日本外務省文化事業部により日本の自然科学、産業に関する和書を中国市民にの閲覧に供する目的で中国北京近代科学図書館が設置され、銭も日本語講師を務めた。この図書館こそ銭の提案が一定程度実現されたものであつたとも言えるだろう。

また、松村太郎は冒頭の自己紹介どおり「泉寿東文書庫関係者の一人」であることは間違いないだろう。運営のための支援要請を纏々述べており、資金確保に腐心していたことが察せられる。さらに、封筒宛名筆跡は前述の徳富蘇峰記念館所蔵設立趣意書の宛名筆跡を比較してみると酷似しており、同一人物、すなわち松村太郎が書したものとみてよいであろう（図二参照）。

さらに注目すべき点は、泉寿東文書庫が日本語文機関誌『字紙箋』を配布し、附録として銭稻孫編集の中国語機関誌『学舌』を発行しようとしていたと述べられていることである。機関誌『字紙箋』は、鄒双双氏の提示された在中國公使館報告書にも記述があるものの、鄒氏は「未見である」と述べている。今般、岩波書店及び東洋文庫に『字紙箋』が所蔵されていることを確認した。岩波書店には一九三〇年分¹⁰が、東洋文庫には一九三〇〜三五年分が保管されていた。そこで、東洋文庫所蔵分について閲覧調査した。また『学舌』も東洋文庫に第一〜五号が蔵されており、併せて調査した。調査から見えてきた文庫の概要、銭稻孫と日本人との交流状況を見てみよう。

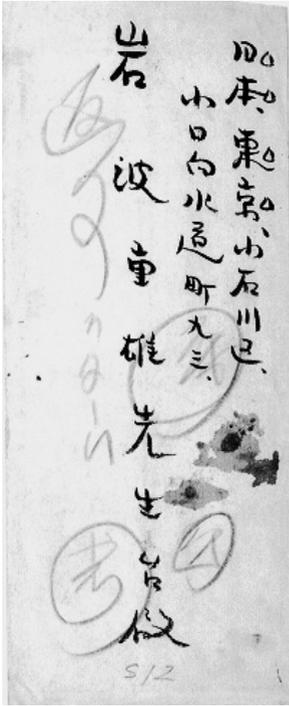
【図二】

徳富蘇峰宛書簡表面宛名（公益財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団蔵）



「日本、東京、市外、大森、山王」
「徳富蘇峰先生台啓」

岩波茂雄宛書簡封筒（株式会社岩波書店蔵）



「日本、東京、小石川区」
「小日向水道街九三」
「岩波重雄先生台啓」（「重雄」と誤記）

銭稻孫の私設日本語図書室「泉寿東文書庫」

四、機関誌『字紙箋』に記録された泉寿東文書庫

なぜ東洋文庫に『字紙箋』が所蔵されていたのか、その経緯について先に確認しておきたい。
『東洋文庫の名品』（東洋文庫、二〇〇七年）「財団法人東洋文庫の八〇年」には「松村太郎氏寄贈の近代中国関係書・雑誌」の一項があり次のように記されている。

松村太郎氏は上述の在北京順天時報社の社員であったが、東洋文庫が設立当初に各種の漢籍、叢書、地方誌、族譜、明実録等を収集するに当たって、格別の尽力にあずかった。氏は昭和十五年（一九四〇）に帰郷し、同十八年（一九四三）にその蔵書であった近代中国関係書冊・雑誌（中文・日文）数千冊を寄贈したが、惜しくも翌年逝去された。

岩波茂雄宛書簡の内容も併せて推測すれば、松村の東洋文庫寄贈雑誌の中に『字紙箋』が含まれていたとみてよいであろう。『字紙箋』第一巻第一号より書誌情報を見よう。編輯所及び発行所は、「中華民國・北平・東城・西堂子

胡同・中華公寓内・字紙簾社」(十一頁末尾)で、「中華民國特准認爲新聞紙類(毎月一回十五日発行)」(最終十二頁左上)との発行許可情報がある。

創刊号・第二号の冒頭には日本語・中国語で、第三号は日本語で設立趣意書が掲載されており、文面は徳富蘇峰記念館所蔵のものと一致する。掲載内容は、随筆、学术界動向記事、取次書目録、文庫の運営状況報告(寄贈者及び寄贈内訳、会計報告など)などであるが、運営資金確保のための書籍取次書目が紙面の半ばを占める。

第二巻第八号(一九三一年八月)までに十二回の寄贈記録があり、寄贈者名・所在地・書名(一名につき一冊)・冊数が掲載され、約一年半で日中双方の法人・個人延べ四百余名が寄贈している。また、当初三回の報告には「金銭の部」があり、坂西利八郎(第一回)・大倉洋行(第二回)などが寄付金を拠出したこと、設立趣意書の印刷は二回で計一五〇〇部であったことがわかる。第一巻第五号(一九三〇年五月)には、早くも東京・大阪・大連など六地区十ヶ所の寄贈仲介者が設けられており、早々に寄贈の受付体制が整いつつあったことがわかる。寄贈者は以下の通りである(所在地別、五十音順)。

【法人・団体等】(括弧内は寄贈回数、冊数。「毎」：雑誌毎号)

北平：大倉洋行(二、二)、集文閣書莊(二、七)、順天時報社(二、数百)、中日密教研究会(毎)、中村医院(一、一〇)、日本公使館(二、多数)、三菱公司(一、一)、来薰閣(一、一)

上海：上海滿鉄事務所(一、八) 漢口：同仁病院(一、七) 成都：扶經書局(一、一〇七)

浙江：函書館(一、一) 京城：京城帝国大学法文学会(一、五)

大連：亜細亜写真大觀社(一、一)、亜東印画書協会(二、二)、移民文学社(二、二)、新天地社(毎)、大連函書館(一、一)、中日文化協会(三、一五二)、滿州学生読物調査会(毎)、滿鉄情報課(一、二九)、滿鉄大連函書館(二、毎)、滿鉄調査課(九、一一五)

東京：一誠堂書店(九、一八六)、岩波書店(一、六)、岡書院(一、四一)、科学知識普及会(一、一)、神谷書店(一、一)、外務省(一、六)、学習社(一、十二)、金雞学院(三、四)、禁酒同盟(一、一)、巖松堂書店(一、八)、厚生閣書店(一、一〇)、工政会出版部(一、一)、古今書院(一、十五)、後藤伯藏書整理

係(一、八七)、狐狸窟詩房(一、一)、桜木書房(一、二)、三松堂(一、一四)、三省堂(一、一一八)、四六書院(一、一〇)、至誠書院(一、一)、実業の日本社(一、三)、信義堂(一、二)、新進詩人社(二、四)、静嘉堂文庫(一、一)、政教社(每)、大同館書店(一、一)、大日本図書株式会社(一、十五)、大明堂(一、一)、地学協会(二、二)、東亜研究会(六、七)、東亜考古学会(一、一)、東亜同文会(每)、東京堂書店(一、一)、東西医学会(一、一)、東方文化学院(一、一)、東洋協会(每)、東洋協会學術調査部(每)、東洋図書株式会社(一、八)、東洋文化協会(三、六九。每)、東洋文庫(三、四二)、財団法人同仁会(七、十五。每)、同文館(一、七六)、日華俱樂部(三、三)、日本評論社(一、一)、万国聖書研究会(二、五)、文求堂書店(三、二二)、平凡社(一、三)、宝文館(一、十三)、北星堂(一、三)、北隆館(一、十一)、丸善株式会社(一、一)、明治書店(一、三)、明治文化研究会(每)、明文堂(一、六)、目黒書店(一、二)、雄山閣書店(一、二)、六合館(一、四)

京都・東方文化学院京都研究所(一、一)、日活撮影所(一、五〇) 名古屋・名古屋正文館(一、二四)

福岡(博多)・九州帝国大学(一、四)、九州帝国大学図書部(一、三) 金沢・池善書店(一、三)

高野山・金剛峯寺(一、六)、高野山時報社(一、五)、密教研究会(一、一)

山口・東亜経済研究会(每)、東亜経済調査局(二、二。一回は在東京)

【個人・中国人】(括弧内は寄贈回数、一回の場合は省略)

北平・金九経(四)、吳燕紹、黄子明(四)、黄文弼、周叔迦、徐鴻宝、秦墨晒、錢稻孫(六)、宋斐如、曾彝進、

張我軍、陳垣、程光銘、湯爾和、闕鐸、馬衡、方政英女史、楊樹達、劉栄記

東京・劉栄記、秦萍

【個人・日本人】(括弧内は寄贈回数、一回の場合は省略)

北平・飯島正隆(五)、生嶋捨次郎、池田克己、石橋丑雄(二)、市原徹夫、市吉徹夫、井上元成、今関天彭、遠

藤戒三(二)、大木謙吉、萱原信雄(四、うち一回は在東京)、萱原信之、川村狂堂(二)、公平万、坂井忠

道、櫻井英大、佐々木忠(三、うち一回は在東京)、澤山弦次郎、鈴木吉武(四、うち一回は在東京)、田

錢稻孫の私設日本語図書室「泉寿東文書庫」

原悦二(二)、田部井政吉、時政清、長岡克暁、西山貞男、原田梁次郎、宝珠山人(四)、松村太郎、水越治彦(二)、矢野春隆、山本忠孝、無名氏

南京・伊藤武雄、小口五郎 上海・宮本通治 青島・波多野亀太郎

大連・石田貞藏、板橋辨治(三)、伊藤清藏、稻葉亨二(二)、上野充一、大谷亀之助、可須水義山、笠木良朋、加藤郁哉、小島憲、小林胖生、志垣熊雄、島崎恭爾、城小確(二)、須田慎一郎、松崎鶴雄(二)、山口慎

奉天・園田一亀(四、うち一回は在北平) 瀋陽・黒田源次

台北(台湾)・井出季和太(三) 京城・藤塚郷(二) 天津・太田外世雄(三)

東京・浅川保平、浅野源吾、天津周一良、荒尾利吉、池内宏(二)、池田孝道(六、うち一回は在北平)、井坂秀雄(二)、石田幹之助、板橋勉(五)、市川忠男、井上敬次郎、大西齋、岡田保雄(三)、小澤茂一、小野得一郎(二)、片岡峻、加藤繁(二)、亀井豊治、川上鎮雄、河住玄、岸加四郎(四)、北浦藤郎、倉橋藤治

郎、小柳司氣太、里見弴、清水泰次、杉坂梯二郎(二)、鈴木葉子(二)、高田眞治、高田忠周、徳富猪一郎、中山久四郎(二)、長澤規矩也(二)、野口米次郎、林平次郎、林正章(五)、原富男、原田淑人、菱健一、藤田金之丞、藤波剛一(四)、藤原剛一、松本亀次郎、松本長三(二)、水野勝邦、水野梅暁(三)、水野鍊太郎、水野谷英夫(一〇)、御園菊松(二)、山口和一(三)、横山じゅん子、和田清(二)

腰越・河合良朔 市川・唐澤保雄 高田・丸山信次

京都・足利浄円、梅原末治(二)、内藤虎次郎(二)、羽田亨(二、一回は在東京)、水野清一、山田孝三郎(二)

大阪・石浜純太郎(二)、藤昌樹(二)、福田宏一(二)、渡邊薫太郎 岐阜(大垣)・金崎賢(二)

神戸・齋藤恭、巽道順・齋藤恭(二) 兵庫県・鴻山俊雄 奈良県・垂水武雄

奈良・志賀直哉 奈良県(丹波)・中山正善(三) 奈良県・垂水武雄

高野山・大山公淳、梅尾祥雲、水原堯荣 福岡・重松俊章(二)、三松八千世 名古屋・八木幸太郎

仙台・青木正児

東洋学の著名な研究者や小説家・実業家が名を連ねる一方、民間人と思われるものも多く、所在地は中国・朝鮮・日本国内各地に及ぶ。先に挙げた石田幹之助、徳富蘇峰（猪一郎）、松本亀次郎、志賀直哉、里見弴、岩波書店、平凡社、東洋文庫の名も見える。寄贈図書について本稿では書名記載を省略したが、大学や研究機関からは蔵書目録や学術雑誌の寄贈が多く、個人は自身の著書、専門書、古典の翻訳本、各種全集などが多い。分野も文学、芸術、経済学、法律、医学、農業など多岐にわたる。「泉壽東文書藏第一年度會計報告」（第二卷第三号、一九三一年三月）によれば、十二月末時点の蔵書数は図書三、五二〇冊、雑誌八三六冊、閲覧者は十二校のべ三七二人、七〇四冊であった。松村書簡に「北京大学の如きすら、二千餘部」とするからそれを大幅に上回ったことになる。

他方、松村の岩波宛書簡に言及のある中国語機関誌『学舌』は、錢稻孫の編輯、出版者住所は錢宅、題字は北京大学教授などをつとめた沈尹黙（一八八三—一九七一）である。紙面には、日本の学界動向や寄贈者及び主要な寄贈書紹介欄などがあるほか、閲覧の一助として寄贈書に通番が付与されており、ここからも日本の学術研究を中国人研究者へ紹介し、中国人利用者への便を図ろうとした様子が窺える。

ところが、開設翌年九月満洲事変が勃発する。直後に出た『字紙篋』第二卷第九号（十月十五日発行）一面には「泉壽東文書藏一時閉鎖につき御同情者の御諒解を請ふ」との見出しがあり、泉壽東文書庫は当面閉鎖し、資金源であった書籍取次も中止し、『字紙篋』を休刊する旨告知されている。事業開始からわずか二年足らずで襲った想定外の社会動乱により中止を余儀なくされた錢の苦衷は察するに余りある。翌年（一九三二）一月の第三卷第一号には「泉壽東文書藏關係者一同諒解を得て『字紙篋』を再刊し、之に書目類を掲載し、再開迄は「不肖私（松村太郎）個人、全責任を負ふて懇切に従事」するとの記事がある。これ以降『字紙篋』の紙面は、東洋文庫所蔵最終の昭和十年（一九四〇）五月一日発行（第六卷第四号）まで取次書目及び連絡事項のみを掲載する。

終わりに

錢稻孫は、日本の文化学術を広く収集し中国の学界の向上の一助としたいとの強い思いから自邸内に泉壽東文書

庫設立した。開設からわずか二年弱の間に、北京大学を上回る日本語図書蔵書量へと拡大した。その運営には実務担当の支援者として日本人松村太郎の存在があった。資金面の原因から寄贈を募る方式を採用したことは、銭の認知度を更に高め、東洋学分野を中心に日本の学術界との結びつきを強めたと推測される。翌年秋の満洲事変により文庫は一時閉鎖を余儀なくされ再び公開されることはなかったが、「北京大学」図書館長、北京近代図書館日本語講師などの任に就き日中文化交流の中国側代表の一人として日本との関係を益々深めていった。泉寿東文書庫開設は銭稲孫の人生に影響を与えた重要な転換点の一つであったと言えるだろう。

注

- (1) 鄒双双『「文化漢奸」と呼ばれた男——万葉集を訳した銭稲孫の生涯』（東方書店、二〇一四年）第九章『文化漢奸』の虚実』において、外務大臣宛在中国公使館報告書「支那人の日本語及日本事情研究状況調査」の一項「北平ニ於ケル日本語及日本事情研究状況調査」（アジア歴史資料センター資料 B04011412400）及び文潔若の回想に基づいて言及する（一九〇〜一九三頁）ほか、複数箇所で泉寿東文書庫が挙げられる。
- (2) 本稿所載の機関誌、書簡等の著作権について、法人の実質的消滅時期及び発信者の没年、さらに書簡著作権承継者の存否を慎重に確認した。その結果、問題ないと判断し掲載するものである。
- (3) 高木理久夫編・呉格訂「銭恂年譜（増補改訂版）」（『早稲田大学図書館紀要』第六〇号、二〇一三年、一〇八〜一九五頁）参照。
- (4) 韋慶媛「図書館の另類館長銭稲孫」（『読書』第三七七期、二〇一〇年十月、九二〜九九頁）結語に「抗戦爆發後、這位圖書館の另類館長保護了北大、清華の圖書、使兩個重要的圖書館在危難之中避免遭受更大的劫難、這些是我們應該予以肯定的。」とある。
- (5) 石田幹之助「銭稲孫先生のこと——二千六百年記念論文集寄稿者」（『国際文化』第十二号、国際文化振興会、一九四〇年、三三〜三五頁）。

- (6) 鴻山俊雄『日中交流七十年——その道——筋の回顧』(華僑問題研究所、一九八八年)によれば筆者は昭和五年(一九三〇)北京へ留学し「北京在住三十年の国民新聞駐在記者松村太郎夫妻」の世話を受け(九三頁)、松村から「錢稲孫氏に紹介され、ご指導を受けるだけではなく、お世話になった」(九七頁)と回想している。
- (7) 松本亀次郎『中華五十五日遊記』(東亜書房、一九三一年)一〇六〜一〇九頁。
- (8) 里見淳『滿支一見』(春陽堂、一九三一年)、『志賀直哉全集』第十一卷「滿洲日記」(岩波書店、一九七三年)参照。
- (9) 岩波書店編集部編集『岩波茂雄への手紙』(岩波書店、二〇〇三年)「岩波茂雄宛書簡差出人一覽」松村太郎の項五三頁)に「一九三七年三月七日」とあるが、一九三〇年が正しい。東京帝国大学原田淑人教授の北京大学での講義は一九三〇年三〜四月に行われた(アジア歴史資料センター資料 B05015652100、十四頁参照)。
- (10) 岩波書店編集部編集『岩波茂雄への手紙』(岩波書店、二〇〇三年)「岩波茂雄宛書簡差出人一覽」七四頁。

※資料の閲覧、調査、発表にあたっては、所蔵先である公益財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団、株式会社岩波書店、公益財団法人東洋文庫のご許可を頂いたこと、また大分県国東市重吉喜一郎氏に調査のご協力を頂いたことに篤く感謝の意を表します。